

じさんじょの会

調査団体名	: じさんじょの会	団体代表者名	: 荻野昌彦
設立年	: 2000(平成12)年	対応してくれた人の名前	: 荻野昌彦
団体URL	:		
活動拠点	: 岡崎市千万町木下	調査員	: 唐澤晋平、唐澤 萌
取材日	: 2014年11月15日	レポート作成者	: 唐澤 萌

活動内容

地域に残っていた茅葺屋敷を整備しなおし主な拠点として活動。田植え、稲刈り、餅つきなど各種イベントの主催。イベントには名古屋、豊橋などから参加する人も多く、街の住人と地域住人の間に交流がうまれた。参加者には村民制度に加わってもらい、会費を徴収する代わりに年間のイベントに自由に参加できるようにしてリピーターを獲得。茅葺屋敷では地域の女性たちによる物販もあり、こんにゃく、五平餅などがよく売れた。それらは少なからず女性たちの現金収入となり、また、家に閉じこもりがちなお年寄りや女性が集まる良い機会になっていた。屋敷は宿泊施設としても開放していて、地域外の多くの団体が利用していた。その中の一つ、happypunchは今でも地域の畑を借りて週末農業をしており、他にもお祭や盆踊り大会などにも積極的に参加、地域のメンバーとして受け入れられている。

キャッチフレーズ

つくりつづける、ふるさとづくり

会のモットー(何を大切にしているか)

和気あいあい 明るく 楽しく

設立から現在に至るまで変化したこと

2000年、千万町小学校廃校の危機感から、移住者人口の拡大を目的として茅葺屋敷での活動を始めた。2006年、岡崎市に編入。2014年、地主の意向で屋敷を返還することとなり活動の拠点を失う。また同時に、茅葺屋敷への来客数も頭打ちになっていたこと、そして小学校も廃校となったことにより、今、会の活動の転換期をむかえている。

連携している団体・専門家・自治体など

ふるさとづくり委員会、happypunch(農業サークル)、岡崎市

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動内容に同じ

現在直面している課題

茅葺屋敷にかわる新たな活動拠点を作ること。(廃校になった小学校を利用する案も出ているが、市の施設なので活動に制約がかかってしまう。)メンバーの世代交代の時期をむかえていること。
茅葺屋敷では不十分だった、移住者人口を増やすための対策の強化。
地域が活性化しているとはどんな姿なのか。「活性化」そのものの共通認識の模索が、今一度必要。

今後やってみたいこと

茅葺屋敷での活動では移住希望者を獲得するまでは至ったが、その後様々な問題が表面化した。改めてマッチングの難しさに気付かされた。今後は新たな拠点で地場の食材を売ったり、イベントを開催することで地域のPR活動をすると同時に、移住希望者リストの作成と、空き家情報リストの作成し、その両者のマッチングを、より積極的にアプローチしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

岡崎市の企画課、商工会、マスコミ、政治家

チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじよの会の名前の由来

<答え>

じさんじよとは、絶滅危惧種であるヨシノボリの呼び名。集落を流れる川にたくさん生息し、極ありふれた生き物だったが、昭和40年代から環境の変化や川の汚染により30年近くにわたって全く姿を見なくなっていた。しかし近年また目撃されるようになった。このじさんじよの復活のように、地域を再び活性化させたいという思いが会の名前に込められている。また、語感も「地産」や「自然薯」などに通じて面白い。

チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじよの会を運営するにあたって難しかったこと

<答え>

平日、周辺の町へ働きに出ている住民も多い中、土日に集中して活動せざるをえないため、それを負担に感じる住民も一部いた。また、茅葺屋敷の運営を維持していく上でどうしても仕事を当番制にすることもあり、有志で始めた活動がいつのまにか義務化してしまい、報酬が出ないことへの不満が出たこともあった。

目に見える成果がすぐに出る活動ではないので周囲への理解が得にくいと同時に、自分たちのモチベーションを保つことも時に大変だった。

その他、伝えたいこと

少子化、高齢化、過疎化、地域の抱える問題は山積しているが、どれもいずれは日本が全国的に抱える問題ばかり。その先陣を切っている、先駆者であることを楽しみたい。

写真



田んぼで農業体験



昔ながらの結婚式